辻元清美の永田町航海記 108

イラストレーション／石坂啓

「オレオレ」議員だらけの永田町で汗をかく日々

国会内では脱原発に向けての議員会合が活発に開かれている。

超党派の「原発ゼロの会」では、全炉廃炉への政策提言を目指し、政府だけに議論を任せておけぬと「国会エネルギー調査会（準備会）」をスタート。五月二一日には飯田哲也・植田和弘・枝廣淳子の三氏と政府需給対策検討方針の検討をした。

さらに「与党内の『脱原発』活動が政治的に大きな力を発揮する」と菅直人前首相とともに立ち上げたのが「脱原発ロードマップを考える会」だ。「ロードマップでは、単に脱原発の時期だけではなく、それぞれの時点での、総エネルギー量、総電力量、再生可能エネルギーの比率など、実現可能性のある計画が必要です。……脱原発と並行して、放射性廃棄物の処理や原発廃炉の見通しも立てなくてはなりません。さらには、再生可能エネルギーへの投資や廃炉にかかる費用などの経済的な影響も併せて検討する必要があります……」と呼びかけ、現在五五人が核になって議論を積み重ねている。

ドイツでは一〇年間で全原発を停止させるロードマップを決定。日本でも、まずこの工程を示さなければ。でも政府がフラフラ、モタモタしているので「与党の中でこの工程表を作って突きつけよう」とNGOと連携しながら作業を開始したのだ。

民主党内には「小沢派vs.反小沢派」とか「TPP賛成vs.反対」とか「消費税賛成vs.反対」などの対立軸がある。しかし、この「脱原発の会」は対立を超えて多彩な顔ぶれだ。TPP反対の山田正彦前農水大臣もいれば、政府内で推進した福山哲郎前官房副長官もいる。顧問には江田五月元参議院議長と菅前首相。平岡秀夫前法務大臣や私が世話人となり、実務を担う。今月中には脱原発への道筋を示し、実現に向けて各方面との調整に入りたい。

「反対」と主張し対案を示すだけではなく、実現にこぎつけられるかどうかが政治家としての腕の見せどころだ。そのためには自論をあまり鮮明にしすぎるより、各方面に調整をかけていく方が実現につながることが多い。「汗は自分でかきましょう。手柄は人にあげましょう」という竹下登元首相の言葉は、「オレオレ」議員だらけの永田町でいまも光る。もちろん、ストレートに主張をぶつけてきた「ソーリ、ソーリ」のころより「ストレス」が溜まる。

そんな政治の現場でストレスと闘いながら考えたことを一冊の本にまとめた（『いま、「政治の質」を変える』岩波書店）。与野党固定化から政権交代時代に移った今の政治の原理とは？「よい統治」とは？　市民運動と政治の連携は？　橋下徹大阪市長については？　そして東日本大震災での被災者支援、日本航空破綻処理、普天間問題などでの政権内のディープなやりとり、官邸の中で焦りと苦悩が続いた日々……。今まで明かせなかった事実も書いた。

「政権交代しても何も変わらない」と怒っているアナタ。「最近、ツジモトはおとなしいんじゃないの」と思っているアナタ。そんな方にこそ、読んでほしい。そして政治を諦めないでほしい。「心のデフレ・スパイラル」から抜け出すために。

（つじもと　きよみ・衆議院議員）

5月22日16時現在。今回で最終回となります。　つじともWEB　http://www.kiyomi.gr.jp/　ツイッター　@tsujimotokiyomi